

## 秀 賞



### 諦めない心

宮城県古川黎明中学校

三年 伊藤 愛 唯

好きなことや趣味を持っている人は多いでしょう。「あのアーティストが好き」「このスポーツをずっとしている」というように、人によっていろいろあると思います。私にとつてのそれはピアノ。幼稚園の時からずっとピアノを習っています。私は、ピアノと共に生きてきたと言っても過言ではありません。嬉しいこと、楽しいことがあった時。嫌なこと、悲しいこと、落ち込むことがあった時。私は必ずピアノに向かってその時の気持ちを弾いてきました。でも、そういったずっと続けているものというのは、やめたくなる時期がくることがあります。

昨年、中学二年生の夏。私は通っているピアノ教室の発表会に参加しました。発表会の曲はいつも自由なので、私はショパンの「子犬のワルツ」という曲を弾きました。この曲を決めたのは一月だったのですが、半年しかない中で私はこの曲を練習していました。それでも、この曲はプロのピアニストでも表現することが難しいと言われるショパンの曲。練習しなくてもすぐに弾けるようにはなれませんでした。先生には、ずっと同じところを直され、何回練習してもうまく弾くことのできない日々、私はもう疲れてしまい、いつの間にかピアノを弾くことを楽しいと

思えなくなっていました。勉強が忙しいから、部活で疲れたからと自分に言い訳をし、ピアノに触る時間も減っていきました。時間が経つにつれ「この発表会が終わったらピアノをやめよう」という気持ちが私の心の中に生まれてきました。そんなことを考えているうちに、私は一冊の本に目がきました。それは、私がピアノを習い始めた頃に弾いていた、練習曲のバイエルの本でした。楽譜をめくってみると、どのページにもたくさん指番号が書かれていたり、よく間違えるところには印がつけられていたりしました。私は、小さいなりに頑張っていたのだと思うと、懐かしく思えてきました。同時に、今の私はその頃の私よりも頑張っていないのではないかと疑問を持ち始めました。そして、その疑問に対する答えを考えるよりも先に、私はピアノに向かっていました。それからは、毎日学校から帰ると、時間を忘れるくらい練習しました。先生に直されることも少なくなり、だんだんと弾けるようになっていきました。

そして発表会当日を迎えました。先生からの手紙には、「有名な作曲家さんの曲だからプレッシャーがかかると思うけれど、楽しんで弾いてね」と書いてありました。大好きなピアノ。大好きなショパンの曲。思いつきり楽しもう。そう思うと指の震えが止まり、落ち着いてきました。ライトで照らされたステージに向かい、ゆつくりとお辞儀をし、ピアノと向かい合いました。一音目を弾いたその瞬間から、先生の言葉通り、私は心が弾むように楽しんで弾くことができました。曲が終わりに近づくと、今度は終わってしまうことに淋しさを感じました。演奏が終わり、客席に向かって一礼をして顔を上げると、客席の人たちの笑顔と拍手する姿が目飛び込んできました。ステージから見た最高の景色でした。今

まで何回かあった発表会の中で、一番自分の納得のいくパフォーマンスができたのです。私の心は、やり遂げたことへの嬉しさと達成感で満たされました。一生懸命練習したからこそ、途中で投げ出さなかったからこそ、私の目に映る素晴らしい景色。私はこの先、あの光景を忘れることはないでしょう。あれから一年が経った今、私はピアノを続けています。そして今は、次の発表会に向けて、さらに難しい曲に挑んでいる最中です。もちろんすぐに上手に弾くことはできないし、先生にたくさん指導もされています。でも、あの時の私とは違います。今の私は、ただ前だけを見て練習しています。あの時、ピアノをやめなくて、後悔しなくてよかった。心の底からそう思います。

もし、何かの事情で途中で諦めてしまったことがある人や、あの時続けていればよかったと後悔している人がいるかもしれません。今からもう一度チャレンジしてみようと頭の片隅に少しでも思っていたら、絶対にチャレンジした方がいいと思います。新しい何かに出逢えるチャンスです。私もこれからは、今まで出たことのないコンクールにも挑戦してみたいです。

がんばったからこそ見えること。諦めなかったから味わえる感情。続けることの大切さ。やめない強さ。私はこのことを、ピアノを通して気付くことができました。これから先も辛い練習は避けられませんが、たくさん壁にぶつかることもあると思います。でももう私は、ピアノをやめようと思うことは絶対にありません。あの時、諦めない心を教えてくれた過去の私と、大好きなピアノに、感謝して。